

マンハイム知識社会学とその周辺

千葉 芳夫

私が大学に入学したのは昭和四十三年、大学紛争が激しくなった年である。次の年には、紛争のあおりで東大の入試が中止になるということもあった。様々のセクトの主張が対立し、互いに相手を攻撃しようという状況であり、一体どれが正しく、どれが間違っているのか、それを判断するのは困難というより、ほとんど不可能に近いと感じられた。

そんな中で、たまたまマンハイムの『イデオロギーとユートピア』を読んだ。これが知識社会学との出会いであった。今になって思えば、まさに、イデオロギーの対立状況を考察した著作であったわけだが、その当時は、もっぱら、何が正しいのかという問題にばかり関心が向いていた。認識の真理性とか客観性とか、いわゆる経験科学的な問題とはかけ離れたところから社会学に入っていくことになったのであり、この傾向はどうもいまだに続いているようである。

大学院に入ってから本格的にマンハイムの知識社会学と取り組むことになった。一番難しかったのは、彼の思想基盤となっている歴史主義の理解であった。一切のものを流動し、変化するものとして捉え、しかもその全体を認識しようとするという志向は、およそ近代合理主義的な思考法とはかけ離れている。しかし、歴史主義の理解なくしては彼の知識社会学は理解できない。特に、しばしば曖昧な概念とされる存在概念や、存在適合的意識という真理概念は、歴史主義的な存在概念が前提となっているのである。このようなことがだんだん分かってきた。もっとも、認識論的問題に対する彼の解答は、「動的総合」につきる。時代を、時代に適合した立場から、もっとも広い視野で捉えている認識が真である、ということだ。実践的な解答とは言えるかもしれないが、多分に曖昧さを含み、十分に納得できるとは言い難いものと感じた。

八十年代に入って、マンハイムの初期の草稿が出版され、それに伴って研究

書も次々出されるようになっていく。不幸なことに、ちょうどその時期にマンハイムに対する興味がだんだん薄れてきた。ブームになっているようなことは余りやりたくない、というへそ曲りな性格も作用したのかもしれない。

マンハイムからシェーラーへと知識社会学の歴史を遡ることになる。マンハイムはシェーラーの知識社会学を批判的に継承する、という関係にあるのだが、両者は、方法も対象も異質である。シェーラーの場合には、宗教、形而上学、実証科学という三種の知識のあり方が知識社会学のテーマとなっている。特に実証科学を他の知識より優れたものとする考え方（シェーラーはこれを、実証主義と呼ぶ）に対する批判が、彼の知識社会学研究の動機となっている。彼はこのような知のあり方の批判を通して、人間がモノの様になる近代社会を批判しているのである。

振り返ってみれば、マンハイムも例えばユートピアの消滅というような議論を通して、近代における知のありようを問題にした、ということができる。つまり、マンハイムの知識社会学もシェーラーのそれも、知のありようという視点からの近代批判として理解できるのである。

さて、社会学で近代を問題とするとときにウェーバーを避けて通るわけにはいかない。最近、ウェーバーを読むことになったのはこのような理由による。そして、このような文脈でウェーバーを読んでもみると、近代的合理性や近代科学に対するアンビバレントな態度にマンハイムやシェーラーに通じる問題意識を感じるようになった。更に、マンハイムとシェーラーを直接に関連付けて議論することはなかなか難しいのであるが、ウェーバーを仲介させると互いの位置関係がつかみやすいように思う。ウェーバーをも含めて、近代についての「知の社会学」としての知識社会学を構想することができるのではないかと考えている。

ポストモダン、いや、ポストモダンの終焉がいわれる時期に、モダン（近代）を問題とすることというのは、時代遅れなのだろうか、それともへそ曲りのなせるしわざなのだろうか。そんな思いにとらわれることもあるが、依然としてマンハイムを中心としたドイツ知識社会学が今のところの研究課題である。

（ちばよしお 佛教大学社会学部社会学科助教授）